



## 愛の神、エロス(eros)

2005(平成17)年2月15日鑑賞(東宝東和試写室)

『エロスの純愛「若き仕立屋の恋」』監督・製作・脚本=王家衛<sup>ウエン・カーウエイ</sup>/出演=鞏俐<sup>コン・リー</sup>/張震<sup>チン・チェン</sup> 『エロスの悪戯「ペンローズの悩み」』監督・脚本・撮影監督=スティーヴン・ソダーバーグ/出演=アラン・アーキン/ロバート・ダウニー Jr./エル・キーツ 『エロスの誘惑「危険な道筋」』監督・ストーリー=ミケランジェロ・アントニオーニ/出演=クリストファー・ブッフホルツ/レジーナ・ネムニ/ルイザ・ラニエリ (東芝エンタテインメント配給/2004年フランス、イタリア、ルクセンブルグ、アメリカ、中国映画/104分)

……カンヌ映画祭を制した中国・アメリカ・イタリアの3人の監督の視点による純愛、悪戯、誘惑をテーマとした3つの別々の物語に共通するものは「愛の神、エロス」。監督名とタイトルそして中国の名女優鞏俐の名前を見ただけで、「これは絶対！」と思うもので、2004年のベネチア映画祭の話題をさらった映画。王家衛<sup>ウエン・カーウエイ</sup>作品には珍しく(?)わかりやすい絶品だが、他の2人の作品は哲学的で難解かも……? しかし、これを機にギリシャ神話を読み返し、「エロス」の神を再度勉強してみよう!

### 昔オムニバス、今トリロジー

この映画のパンフレットには「3人の名匠が、世紀のコラボレーションを結成。一級の芸術作品と呼ぶにふさわしい、風格に満ちた愛のトリロジーを完成させた」とある。理解できないカタカナ語をわかりやすい日本語におきかえようという大きな時代の流れにもかかわらず、映画界や芸能界はなおカタカナ語の方がカッコ良く思われるためか、ワケのわからないあるいは誤解されそうなカタカナ語がいっぱいある。

コラボレーションとかコラボレート作品という言葉はまだまだが、「トリロジー」とは何か? これは「トリ」からわかるように「3つ」を意味する言葉だが、実際に英和辞書を調べてみると、「trilogy = (劇・小説・オペラなどの) 3部作」とある。しかし、「3部作」と、3つの関連性のない物語を1つにまとめたものとは違うので

は……？ そういう意味では、この映画はトリロジーではなく、昔の映画にあった「オムニバス」と表現した方が正しいのでは？

「オムニバス」とは、広辞苑によれば「映画などで、いくつかの短編を並べて、全体で1つの作品にしたもの」とある。このように調べてみると当然「オムニバス」の方が正しいはずだ。

## ミケランジェロ・アントニオーニ監督とは？

今どき珍しいこのオムニバス映画のボスは、1912年生まれだから既に90歳を超えているイタリアの巨匠、ミケランジェロ・アントニオーニ監督。彼の代表作は1962年の『太陽はひとりぼっち』だが、『赤い砂漠』（64年）も有名。もっとも1950年代に次々とヒット作をつくった彼の作品は、私はまだ中学生以前だったためその時代に映画館では観ておらず、もっぱら『スクリーン』や『映画の友』という雑誌で読んでいたもの。したがって当然彼の作品は大人になってから（？）テレビで観たものがほとんど。だから、名前はよく知っているものの、あまり親しみをもっている監督ではない。

## スティーヴン・ソダーバーグ監督とは？

アメリカのスティーヴン・ソダーバーグ監督の代表作は、何といってもカンヌ映画祭でグランプリを受賞した『セックスと嘘とビデオテープ』（89年）だが、最近の『オーシャンズ11』（01年）、『オーシャンズ12』（04年）の大ヒットによって、若者にもその名が広く知られているようだ。また私の大好きな『エリン・ブロコビッチ』（00年）や『トラフィック』（00年）も彼が手がけたもの。

## ウォン・カーウアイ 王家衛監督とは？

ウォン・カーウアイ 王家衛監督については、私の『シネマルーム5』を参照してもらいたい。『2046』は2004年の話題作だが、やはりウォン・カーウアイ 王家衛流（？）のちょっとワケのわからない映画だった。また、カンヌ映画祭で最優秀監督賞を受賞した『ブエノスアイレス』（97年）はレスリー・チャンとトニー・レオンの同性愛をテーマとした、これもちょっと変わった映画。しかし、カンヌ映画祭で主演男優賞と高等技術院賞を受賞した『花様年華』（00年）は、マギー・チャン 張曼玉の美しさを最大限引き出した実に魅力的な作品。

私が思うに、彼はきっと映画をつくるについて、あれもこれもと考える「欲張り人間」なのだろう。だから、1つの作品の中にあれもこれも詰め込んでワケがわからなくなったり(?)、1作だけでは完結できずに次回作に持ち越したりするのは……?

そう考えてみると彼は意外に短編の方が向いているのかもしれない。この映画の最初を飾る王家衛監督の『エロスの純愛「若き仕立屋の恋」』は約45分で、他の2本の約30分と比べると少し長いですが、テーマがシンプルでよくまとまっている。映像の美しさは彼の他の作品と同じだから、この短編は絶品だと私は思うのだが……。

## ソダーバーグと王家衛はアントニオーニの敬愛者……?

パンフレットによれば、「エロスを題材にしたトリロジーの企画を思い立った」のは、アントニオーニと『愛のめぐり合い』で組んだプロデューサーのステファーン・チャルガディエフ。そこで成立したコンセプトは、「アントニオーニと、彼に影響を受けていると公言している有名な若手監督ふたりを組み合わせるといふものです。それぞれが、エロスを題材に、好きな手法で作品を撮る。それ以外は、何をやっても自由です」というものだった。

アントニオーニ監督はすぐさまこのプロジェクトに応じ、ソダーバーグと王家衛を選び出したとのこと。

そして「3部を1本の長編とし、受け持ちのテリトリーの権利を持ち合うスタイルで製作をすすめていくプランを構築した」結果完成したのが、この『愛の神、エロス』ということだ。トータル上映時間は104分だが、私が上映中に時間を計ったところでは、おおむね王家衛が45分、あとの2人がそれぞれ30分ずつという感じだったが……?

## 『若き仕立屋の恋』にみる純愛と性愛——その1

この45分の短編の登場人物は、事実上ホア(鞏俐)とシャオ・チャン(張震)の2人で、あとはストーリー構成上必要最小限の登場人物だけ。そして、鞏俐は美しい高級娼婦ホアという役柄。したがってホアからの洋服(チャイナ・ドレス?)の注文は多く、仕立屋にとっては大得意先。その代金がパトロンから支払われるのか、それともホアから支払われるのかは問題ではない。はじめてホアのアパートを訪れた見

習い中のチャンが別の部屋で待たされている間にその耳に聞こえてきたのは、「お仕事中」のホアの悩ましいあえぎ声。これでは若いチャンは耐えられるはずはない。若い男性特有の肉体的変化が……？ そして、さすが高級娼婦は目が高い……？

目ざとくそれを発見したホアは、チャンに対して「ズボンを脱げ」と命令。これは、一流の仕立屋に成長するためには、女の身体を手指の感覚で覚えなければ……という温かい応援だった(?)が……？

## 🎬『若き仕立屋の恋』にみる純愛と性愛——その2

「花のいのちはみじかくて、苦しきことのみ多かりき」とは、林芙美子の『放浪記』の名文句だが、少なくともその前半の言葉はすべての女性に共通するもの。「高級」を誇ったホアの商品価値(?)がかげりを見せはじめると、パトロンも離れることになり、ホアは次第に落ち目に……？

他方、見習いだったチャンは今や立派な一人前の仕立屋に……。しかし、最初に仕立屋としての心構えを教えられ(?)、かつ性愛の手ほどきを受けた(?)チャンは、ずっとホアのことを想い続けていたから、最後の最後までホアのために尽くす誠実さをもっていた。

その誠実さは、今やアパート代も払えなくなったホアのアパート代を払ってやるという金銭面の他、キスをすると病気がうつるからせめて手だけで……とチャンに話しかけるホアに対するキスの嵐にも……。これぞ純愛、とほめてやりたい、ホントの純愛だ。しかし最後は……？

こんな切なくも悲しい純愛と性愛の45分ドラマを、鞏俐と張<sup>チャン・チェン</sup>震の2人が実に悩ましげに演じている。その美しいタッチはまさにあの『花様年華』の再現だが、ストーリーがシンプルでわかりやすいだけにこちらの短編の方がベターかも……？ 私としては、王<sup>ウォン・カーウアイ</sup>家衛監督のベスト作品と思うほどの出来だが、さてあなたは……？

## 🎬『ペンローズの悩み』はちょっと病的でヘン……？

ソダーバーグ監督の『ペンローズの悩み』は、変な夢をみて苦悩するニック・ペンローズ(ロバート・ダウニー Jr.)とその悩みを聴く精神科医のパール(アラン・アーキン)の男性2人が主人公。そしてニックの夢の中に登場するセクシーな女性(エル・キーツ)は、裸で風呂に入るシーンと美しく正装した姿を見せるだけ。その大半

はパール医師の診察室が舞台だし、2人の会話だけで成り立つ映画だから、多分製作費は安いもの……？

パンフレットのイントロダクションには、例によってカタカナいっぱい難しい解説があるが、大阪の坂和弁護士流にわかりやすくいえば、要するにちょっと病的でヘンなオッチャンが精神科医に相談するが、その精神科医もちょっとヘンなオッチャンだということ。まあ、誰にでもこんなヘンな部分はあるもの。エロティックな夢なんて男なら誰でもみた経験があるはず。

もっとも、毎日同じエロティックな夢をみるとなると、完全な病気だと思わざるをえない……？

### 『危険な道筋』は哲学的で超難解……？

92歳のアントニオーニ監督が描くエロスの世界はカオスの世界。カオスとは「混沌」。こうなると何のこっちゃわからなくなる……？

『危険な道筋』の主人公は、倦怠期にある中年夫婦のクリストファー（クリストファー・ブッフホルツ）とクロエ（レジーナ・ネムニ）だが、そこに謎めいた若い女性のリンダ（ルイザ・ラニエリ）が絡んでくる。東洋の映画と違ってイタリア映画のエロスはより生々しい……？

最初の出会ってからベッドで裸になってクリストファーを誘うリンダや海辺に押し寄せる波に足を洗われながら全裸で無心に踊るクロエの姿などを観ていると、アントニオーニ監督の狙いが何となく感じ取れるものの、やっぱり哲学的で超難解……？

これをパンフレットに書いてあるように、「アントニオーニ監督は宇宙的な視野に立ったエロス論を展開させる」と難しく表現するのが果たして正しいのかどうか……？ 私は、どうもそういう表現が大キライ……？

### 愛の神、エロスのお勉強

エロとかエロス（eros）という言葉は、性愛とか性欲を意味するものとして日本に定着しているが、そのエロスがギリシャ神話に登場する「愛の神」であることについては、知らないか知っていてもボンヤリとしか知らない人が多いはず。そこでエロスとはどんな神なのかについてちょっと勉強してみよう……。

こんな興味（問題意識）をもったときに便利なのがインターネット。パンフレット

のプロローグにも紀元前8世紀のヘシオドスの『神統記』の中に記されているというエロスの誕生について少し書かれているが、果たしてこの解説が正しいのかどうか、あるいは異説はないのかどうか等について、今の時代では、すぐにインターネットで調べることができる。エロスのローマ名クピド (cupido) は、英語読みではキューピッド、ローマ語では愛を意味するアモール (amor) だが、そのエロスの誕生については実はさまざまな説があるらしい。

パンフレットに書かれている『神統記』が記しているというエロス誕生のお話 (神話) は興味深いが、他の諸説もそれぞれに面白いもの。背中に翼を付け弓矢を射ようとしている少年の姿がもっとも一般的なキューピッド (エロス) の姿だが、その姿が生まれるについてもある物語が……？

たまには彼女と2人でゆっくりとワインを傾けながら、資料を手に、こんなギリシヤ神話の神々の物語を語り合うのもオツなものでは……？

2005(平成17)年2月16日記